

太陽と月 Sun and Moon

藤田雅史

二四歳の誕生日の朝に母から届いたメールは、次のようなものだった。

〈お誕生日おめでとう。もう二四歳ね。明子が生まれてからふたまわりもしたのね。もう立派な大人ね。仕事頑張んなさいね〉
てつきり、最近いい感じの雰囲気になりつつある角田くんからのお祝いメールかと期待して開封したので、私は、差出人が母だったことに落胆しながらそのメールを読んだ。

語尾に「ね」が多すぎてくどい。「ふたまわり」といわれてもピンとこないし、「立派な大人」というのもなんだか当てつけがましい。それに去年の書き出しも確か、「もう二三歳ね」だったと記憶している。

面倒くさかったけれど、何も返さずスルーするのも反抗期の娘みたいで「立派な大人」としては不甲斐ないので、とりあえず、

〈ありがとうございます。仕事いつてきます〉

とだけ返した。だいたい、その日は平日で、出勤前に丁寧な返信を入力する余裕などなかったのだ。

母がくも膜下出血で倒れたのは、その二日後だった。

実家に暮らす弟からの電話も、朝の忙しい時間だった。

「姉ちゃん、どうしよう。母さんが倒れた」

それはあまりにも突然のことで、私は最初、母が弟に頼んで、誕生日に素っ気ない返信しか寄越さない娘に仕返しをしようとしてドツキリを仕掛けたのではないか、と考えた。

でも、母はそういう人ではないし、弟もそういう冗談に付き合

うような人ではない。

電話口の弟は、私に相づちをうつ余裕も与えずまくしたてた。

「いまあのさつきすぐ救急車きて救急車で運ばれて父さんがそこに乗ってんだけど母さん意識ないんだけど台所で俺シャワーして出てきたらいやシャワーは風呂場だけど上がってきたら台所でどこの病院かまだわからないからわかったらもう一度電話するか父さん携帯ちゃんと持ってたのかな俺どうすればいいんだよってか母さんの保険証の場所がわかんないんだけど姉ちゃんわかる?」

弟の声の震えが、電波を通して私の身体を震わせた。

「えと、それ、お母さん大丈夫じゃないってことだよね?」

と私が訊ねると、弟は、

「知らねえよ、俺、医者じゃねえもん!」

と、拳を振り回すような大きな声を上げて泣き出した。

私はそのとき、母の死を覚悟した。

母はまだ五三歳だった。

通夜のときも葬式のときも、誰もが「早すぎる」と言った。というかそれしか、口にできる確かなことがなかった。

母親というのは自分よりも早くこの世からいなくなってしまうものだと、私だつて頭の中ではわかっていたけれど、え、いま?もう?という感じで、やっぱり私にとつても、五三歳の母の死は早すぎた。

あれから四ヶ月が経ったが、母のことがそんなに好きだったのか、と自分自身が驚くほど、私は母の死を引きずっている。母の面影を追い求めてばかりいる。

母の暮らしていた実家には、いまも母の名残に囲まれて、父と弟が前と同じように住んでいるけれど、彼らの方がむしろ、素直に母の死を受け入れ、立ち直りかけているように見える。

病院でも葬儀のときも、恥ずかしいくらい取り乱して、私に涙

を流す余裕さえ与えてくれなかつたくせに、父と弟は、私を置き去りにするみたいに、母のいない暮らしを新しくはじめている。家のなかに母の仏壇があり、遺影がある風景を、自然なものとして受け止めている。

私はといえば、実家に顔を出すたびに、母の匂いに胸をつまらせ、遺影の前からは動けなくなり、未整理の遺品を手にしては、身を振って涙を流してしまう。

「いつか、あんたが嫁に行くときはこれやるからね」

そう言われて、

「いらないつつの、そんなもん」

と冷たくあしらっていた、パールのネックレス。

「姉ちゃん、俺らそういうのどうしていいかわかんないから、姉ちゃんに任せるわ」

そんなこと言われたって、私だってどうしていいかわからない。アクセサリーだけじゃない。洋服も、化粧品も、靴も鞆も、あらゆるものがまだ母の持ち物であって、いまこの世に生きている誰のものでもない。それらを前にして私にできるのは、ただ母を感じて悲しむだけだ。

会社についても、私はこの四ヶ月間、労働意欲を保つことができず、仕事の能率は低下する一方だ。目の前に期限の迫った仕事があるときは何も考えずに没頭できるからいいものの、ふと作業の切れ間ができたり、昼休みに気を抜いてひとりで外食したりすると、途端に母を思い出し、またしても深い闇に沈むような気分になってしまう。

「つらいよね、でも頑張って」

「親の死はみんなが通る道だからね」

「早いか遅いかだけの違いだよ。だから大丈夫」

「いつまでも落ち込んでたら、天国のお母さんが悲しむよ」

周囲の人たちは、やさしい気持ちで私のことを励まそうとしてくれる。でも、私はそんな言葉をかけられるたびに、「お前のお

母さんは死んだんだよ。もう戻ってこないんだよ。二度と会えないんだよ」と、確然たる事実を突きつけられているような気持ちになつてしまう。

「アキちゃんは、明るい子って書いて明子なんだから。前みたいに明るいアキちゃんに戻つて欲しいよ」

先週の土曜日、私がいかに落ち込んでいたので、小学校からの親友のカナちゃんが心配して部屋に遊びに来てくれた。

トートバッグにどつきり荷物を詰めて来たので、なにこれ？と訊くと、アキちゃんの好きなもの、と言って、カナちゃんはタッパを取り出しテーブルに並べていった。私の好物のナポリタンと塩だれ豚ともやしのナムルと茄子漬けを、わざわざ作ってきてくれたのだった。さらに、小学生のときふたりのお気に入りだった「チャーリーズ・エンジェル」のDVDも、レンタルショップで借りてきてくれた。私は、やさしさ、というのものに相当飢えていたので、それだけでもう涙が出た。

「あーあ、なんか昔のアキちゃんの部屋思い出すな」

とか言いながら、カナちゃんは荒れ放題になっていた部屋をテキパキと片付けはじめ、風呂掃除まで手伝ってくれた。

それから夕飯を食べ、一緒にDVDを観て、最後にお酒を飲みながら、カナちゃんは、私の母がどんなに素敵なお母さんだったかを語ってくれた。

私は親友がいてくれてよかったと心から思った。

「カナちゃん、ありがとう。私、頑張るね」

「アキちゃんの明るい顔、見れてよかった」

「本当にありがとう。私にはカナちゃんがいるから大丈夫」

ぎゅっと抱き合つて、一緒に涙を流しながら、アパートの前で手を振つて別れた。私は、なんて素敵なお母さんだろうと感動した。

でも、カナちゃんを見送り、ひとりきりになって、すつきりと片付いた部屋に戻つたとき、私は前よりも余計に悲しい気持ちにな

っていた。

母が死んだという事実は、カナちゃんのやさしさによって、より強固な、動かしようのないことと認めざるを得なくなっていた。そして母の死から四ヶ月が経っても、まだそんな段階にいる自分の未熟さが、深く自分自身を傷つけた。

私は服を脱いでバスルームに駆け込み、シャワーを浴びながら大泣きした。明るく生きるなんてできない、と思った。

明るい子と書いて明子。そのありきたりな名前が、私は幼いきからずつと嫌いだった。正確には、小学校に入学し、名簿や連絡網で自分の名前を周囲の女の子たちと見比べるようになってから、嫌いになった。

クラスの友達には、美咲ちゃんとか、果音ちゃんとか、菜々海ちゃんとか、声に出しても漢字で書いても、キラキラと輝く可愛い名前の子がいっぱいいたのに、私だけが明子だった。平成生まれなのに、なんでこんな昭和な名前？ それは、おかしな言い方が、まったくもって理解のできないことだった。

四年生のときにはじめて同じクラスになったカナちゃんは、果菜子でも香那子でもなく、加納子だった。

その「納」という字の地味さ、華のなさに、私は安心して付き合えたのかも知れない。もしも「な」のところが夏や南だったりしたら、あるいは「奏」と書いてカナコと読ませるとか、そんなこだわりや工夫が見られたら、私は彼女と心を通わせることができなかつたかもしれない。

でもどんなに気に入らないからといって、自分の名前を捨てるわけにはいかない。将来誰かと結婚しても、下の名前は変えられない。

名前というのは宿命なのだ、と悟った私はそれから、「明子」を上手に演じるよう努めた。

いつも笑顔で、明るくて、付き合いやすい、楽しい子。

母が死んでから、私はほとんど毎日、会社を定時で上がる。

事務と営業補助を兼務した派遣社員なので、もともと仕事量の少ないときは定時上がりだったのだが、この四ヶ月はまわりの社員さんも気を遣ってくれて（というより、精神的に落ち込んでいて生産性の低い女に、残業分の割高な時給を与える必要はないということかもしれない）、夕方の六時には会社を出て、六時半には部屋に着いている。コンビニやスーパーに立ち寄ることはあっても、どこかで道草を食うことはない。外食もしない。

では部屋に帰って何をしているかというと、何もしない。

着替えもせずにベッドに倒れ込むように横になり、お腹がすくまでテレビを見たり、スマホをいじって過ごしている。空腹を感じたら近くのコンビニまで歩くが、そのまま食事をせずに朝まで眠ってしまう日も多い。

冷蔵庫には、いちおう食材が詰まっている。たまに、そろそろちゃんと自炊しないとなあ、と思いついてスーパーで野菜や肉を買い込んで帰るのだけれど、冷蔵庫から取り出すのが億劫で、詰め込んだまま腐らせてしまう。

そういえば、カナちゃんが持ってきてくれた塩だれ豚の残りが、まだ冷蔵庫に残っている。そろそろ食べきらないと捨てることになってしまう。カナちゃんがせっかく私のために作ってくれたのに捨てるとかありえない。ただそうは思っても、一度ベッドに横になると、立ち上がれないし、手が伸びない。

以前は、実家に顔を出すと、母がよくタツパに色々と総菜を詰めて持たせてくれた。

最後に母が持たせてくれたのは何だっただろう。

そう思っ、スマホのメールアプリを立ち上げる。母とのメールのやりとりをさかのぼると、

〈肉じゃが作ったから、時間があるとき取りに来なさいね〉
という履歴がある。私はそれに、

〈ごめん、今日忙しいから無理〉

と答えている。母の肉じゃがはとても甘かった。私の好きな味つけではなかった。でも今となっては、あの甘さが懐かしくて愛おしい。

さらにメールをさかのぼると、就職してからはじまった私のひとり暮らしを心配するものばかりが出てくる。

〈明日は昼過ぎに雷注意報。注意しなさいね〉

〈南区で火事あったみたいだけど、そのへん大丈夫？〉

〈車の定期点検はちゃんとしなきゃだめよ〉

それらのメールに、私はほとんど返信をしていない。

余計なお世話。

その一言を呟くだけで、すべてを片付けてきた。

ひとり暮らしをはじめた夜の、

〈さびしくなったら、いつでも帰ってきていいからね〉

娘を案じる母の気持ちのこもったそのメールにさえ、私は返事をしなかった。

その夜は、もう家族の存在を気にせずに、恋人と一緒に朝まで過ごせることが嬉しくてしよがなかった。そのうち、彼もこの部屋で一緒に暮らせたらいいな、なんてことを思いながら、新品の匂いのする清潔なシーツの上で素っ裸のまま男の身体にしがみついていた。着信に気づいてメールをちらと見、なんだ母か、とそのままスマホを枕元のサイドテーブルに放っただけだった。当時付き合っていた恋人とは、ずいぶん前に別れた。

あの夜、パリッとして肌触りのよかったシーツは、今ではすっかりくたびれ、細かな毛玉が浮いて肌触りもざらざらしている。汗をかいても滅多に取り替えないので、常に湿っぽく、きつといろんな微生物が私の健康を害している。

気づくと私は、心の中で母に語りかけていた。

お母さん、ひとり暮らしはやっぱりさびしいよ。ときどき帰りたいよ。でも帰ってもお母さんいないんだよね。そう思うと

帰ることもできないよ。私、いつも明るくなんてられない。ねえ、どうしてこんな名前なの？ もっといい名前つけて欲しかった。ねえ、答えてよ。もっと心配してよ。私こんなにひとり暮らしに疲れてるのに。余計なお世話、してよ。なんで死んじゃったの？

眠りに落ちたのか、夢の縁をさまよっていたのか、記憶が途切れた。ふと目を覚ますと、スマホのバイブが震えている。

件名は「Re:」。

最近誰にもメールを送っていないのにおかしいな。いぶかしく思いながらよく見ると、そのメッセージは、母とのメールのやりとりの画面のつづきに、薄いグレーの吹き出しで届いていた。

〈変な時間に寝ると、夜眠れなくなるからね。夕ご飯、ちゃんと食べなさいね〉

頭の中で、脳みそがぐらりと揺れる。なにこれ。あ、夢か。

〈明子って名前、そんなにいや？ お母さんはね、すごく気に入ってるの。明子が生まれるとき難産だったでしょう。病院のベッドに長いこと横になって、窓の外を眺めてね、ふと、明子がいなくなってる〉

〈明るいって漢字は、お日さまもお月さまもあるでしょう。朝も昼も夜も、いつだって世界を明るくしてくれる。道を照らしてくれる〉

〈そんなふうだね、このお腹のなかの赤ちゃんがずっとずっと、当たり前、明るい世界を生きられますように。道に迷わずにすみませうように、ってね、思ったの〉

〈明子、あんたは大丈夫よ。いまは落ち込んだっていいの。ゆっくりゆっくり、立ち直るからね。ずっと、お母さんは天国から

見てるからね。今もあんたが心配で、余計なお世話したくてうずうずしてるんだからね》

相変わらず「ね」が多すぎる。

でも、うん、わかってる。スマホに向けて頷きながら、こぼれた涙をぬぐうと、でも、次の瞬間、今読んだはずのメールがきれいきっぱり消えていた。私と母の最後のやりとりは、私が誕生日に送ったへありがとう。仕事行ってきます〜に戻っている。

なんだったんだろう。本当に、夢を見ていたのだろうか。

ふと窓の外を見ると、東側の空に小さな白い月が浮かんでいる。それはまるで、母がにつこりと微笑んでいるような三日月だった。

母が倒れたのは春だった。それから暑い夏がやってきて、その夏も終わり、もう秋の空だ、と私は時間の流れを感じた。

窓から見える空に、想像を試してみる。

私が生まれたときのこと。病院のベッドに横になって、あまり動くこともできずに空を見つめていた母。夕日のまぶしさに目を細め、月のかたちを確かめて、そして、私の名前を思いついた。私の名前に願いを込めた。きっとそうだ。

私は身体をゆっくりと起こし、ベッドの上であぐらをかく。

窓の向こうに薄暗い日常の景色があつて、そばの道路を車が通る音がする。遠くに子どもの話し声。窓ガラスには、半分透けたような私の姿が映っている。頼りない二四歳の私。

人間はひとりなんだな、と感じた。

それはいいことでも悪いことでもなく、さびしいことでも心強いことでもなく、ただ、純粹な真実として、そこにある。生きることも、死ぬことも、出会いも、別れも、ひとりでそれを受け止めなくちゃいけない。

そう思うことで、私はようやく、母をもう一度、そばに感じる

ことができる気がした。ひとりの私という人間がこの世界に存在して、その私が思いさえすれば、そこに母がいる。それは生きていてもそうでなくても同じことだ。

父を思えば父がいる。弟を思えば弟がいるし、カナちゃんを思えば、カナちゃんがそばにいてくれる。別れた恋人を思えば、彼が今どんな女と付き合っているかと、すでに結婚しているかと、昔の姿のまままで私のそばに寄り添ってくれる。私が勝手に片想いしている角田くんだつてそうだ。

これからずっと、私は母を思い続けるだろう。そうやって母と一緒に生きていくのだろう。私は歳をとっておばさんになるけれど、母はずっと変わらずに。そしていつか、私の方がおばあちゃんになるんだろう。年下の母に語りかけるのだろう。

私はキッチンの冷蔵庫を開け、食材を取り出した。ひとり暮らしをはじめる前に母から慣わされた、直伝の味噌汁を作る。カナちゃんのくれた塩だれ豚の残りも今夜食べきってしまおう。

とんとん、と野菜を切っていたら、涙が出てきた。

それは太陽の光を弾き、月の光を吸い込む、透明な美しい涙だった。



※この作品はフィクションであり、実在の人物、団体等とはいっさい関係ありません。

※本作品に関するすべての権利は著者本人に帰属します。また、無断での複製・改変・放送・上演等は固くお断りいたします。